



Title	新田研究と水利研究に関する近年の動向 : 近世歴史地理学の課題との関連において
Author(s)	飛田, 雅孝
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1983, 17, p. 17-31
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56466
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

新田研究と水利研究に関する近年の動向

— 近世歴史地理学の課題との関連において —

飛 田 雅 孝

まえがき

土地開発に関する研究は様々な分野から論及されていて、今までの研究成果はぼう大な量に及んでいる。地理学においてもその性格上、きわめて重要な研究テーマとしてとり上げられ、数多くの業績が蓄積されている。その中でも近世における新田開発はその範囲がほぼ全国にわたることや開発量もそれ以前の時代をはるかにしのぎ、開発の主体、方法など多様にわたっているために、他の時代に比べてはるかに多くの論考が提出されている。

地理学における新田開発は主として集落地理学、歴史地理学の立場から研究が進められてきた。新田の分布が全国に及ぶことから全国各地の事例研究は枚挙にいとまがない程であり、事例研究を集大成した著作もいくつか公刊されている。また、研究の対象地域、内容も、一村という狭い範囲をフィールドとして新田の様々な要素をインテリシヴに分析したのから、マクロなスケールで新田の特色を把握したものまで多岐多様に及んでいる。

小稿では、先学の諸研究をふりかえりながら、まず最初に新田研究、次に水利研究の近年の動向を探り、今後の課題について展望を試みたい。なお、同様の試みとして山崎謹哉^①が近世村落研究の歩みを展望する中で新田研究の成果、問題点などを指摘した論攷がある。

(一) 新田研究

戦後、新田研究に関する画期的な著書をわれわれはいくつか得た。その代表的なものに矢嶋仁吉『武蔵野の集落』^②、菊地利夫『新田開発』^③があげられる。前者は集落地理学的立場で武蔵野台地の新田を集落立地と水との関係より解明した研究である。この書は乏水性という武蔵野台地のもつ自然的特色に注目して論じている点、新田集落の立地の研究だけでなく、地域のもつ性格を把握する時の視点の置き方をも示唆し、また武蔵野の集落地誌、新田地誌にもなっているから、地域の叙述の際に参考にすべき点が多くみられる。歴史地理学的立場に立った後者は、著者の長年にわたる事例研究を集大成したものである。その内容は、近世の新田開発論、新田政策、地形的特色よりみた耕地の構造、機能、新田村の性格などを全国各地に及ぶ多くの事例に即して解明し、さらに従来の新田の分類に修正を加え、新田開発の歴史的系列、地理的分布に及んでいる。本書はその後の新田研究の基礎を築いたものとして高く評価されるべき業績といえよう。

さて、上記の著書以降も新田研究は続けられ、数多くの論文が発表されているが、この多くは、他の研究領域においてなされた新田の諸類型に沿いながらその枠組内での「歴史地理学」的あるいは「集落地理学」的研究であることが往々にしてみられた。それは隣接分野からは言及されることの少なかつた点に光をあてるということでは価

値が認められるが、他の学問分野に追随している感じは否めない。ここにおいて、地理学の独自性が発揮されるような新しい方法の出現が望まれるのであるが、このような試みの一つに、自然的条件を考慮に入れて新田開発を捉えるということがある。これは地理学による新田開発研究の存在意義を知らしむるのに大きな意味をもつものと考えたい。日下雅義による湖面干拓の類型化と地域的特色を把握した研究^④などが代表的なもので、全国の湖面干拓の分布（近世の新田開発から戦後の干拓までも含めて）を明らかにし、干拓直前の湖沼のもつ「もっともドミナントな自然地理学的性格」を指標として、ラグーン型、遊水池型、溺れ谷型の三タイプに分け、各々のタイプの分布、特色、それらが卓越するいくつかの代表的地域について地域の性格を論じている。まさしく「地理」を基盤とした指標の設定というべきで、地理学的観点に立った類型化には見ならうべき点が多い。その後、日下は人文地理学における地形環境に意を注ぎ、『平野の地形環境』^⑤を公刊し、ひきつづき地形環境と人間活動の相互関係の解明を試みている。従来地形研究は自然地理学的立場を中心として進められ、それに関わる人間活動はなおざりにされてきた嫌いがあった。逆に人文地理学的立場の研究における地形は自然地理学の成果を利用している場合が多い。日下はこのような状況を顧みて、地理学のもつ自然的側面と人間的側面を有機的に結びつける方法を見出したのである。その著の中では三つの地域の事例が取り上げられているが、従来の自然地理学あるいは人文地理学に偏りがちであった各々の地域の研究成果、さらに空中写真、土壤図、土地利用図、古地図、地籍図などを駆使して歴史時代の地形環境の復元に努めながら、それらの関連で開発の展開を追究しており、開発研究に新たな面を切り拓いたものとして高く評価されよう。また、近世の開発を正面に押し出して論じているのではないが、平野の発達との関連で開発を捉えている点は大いに参考になるであろう。

ちなみに、斎藤晃吉^⑥も、低湿地帯の水田造成の方法は自然的諸条件と対応したもので、①干潟のように堤塘で締め切れば動力なしでも排水でき、開発ができたもの、②内陸水面では自然排水が可能であれば早く開発され、そうでなければ埋立て、掘上げなどで水田の造成がはかられた（この中には後背湿地も含まれる）、さらに、③海岸潟湖沿岸では堤塘で氾濫を防ぎながら水田造成を行なったという三種の類型をあげている。開発方法、耕地の形態などが自然的条件により異なるというのは、地理学的観点に立った指摘であり、日下と相通するものがある。

ところで、低湿地帯といえば、籠瀬良明の『低湿地』^⑦が低湿地研究の事例を集成したものとして知られる。籠瀬は、低湿地の現象形態により谷地田型、扇端型、後背湿地型、三角州型などに分類し、水稻作の歴史的展開を明らかにしている。ここでとり上げられた事例は全国各地に及び、とり扱われる時代も古代から現代までと広範囲にわたっているが、低湿地を「地形や自然的概念であるだけでなく、人間的概念であり、歴史的概念」として捉えている点には学ぶべきことが多い。

一方、地理学の側からは新田開発を居住地域の拡大という観点から捉えるということが重要であると、谷岡武雄は主張している。谷岡は、開発の原景観、開発時期を指標に新田の分布を明らかにした。時期は菊地利夫^⑧に従ったものであるが、景観は地形区分を中心に植生を考慮に入れたものであり、ここでも自然条件が重要な役目を果たしている。これによれば、新田開発はエクメーネの内的充実と外的拡大に大別され、前者は原野・山野の開墾、湖沼・河川低湿地の干拓で、東北日本に多く、後者は海岸部（海面、ラグーン）の開発で、西南日本にみられる。さらに内海型の干拓には大資本が必要で中期に多く開発され、新田型の土地割が最も顕著であると、新田の有する他の要素との関連を述べている。また、湖沼・河川低湿地干拓については、砂丘の内側のラグーン干拓（＝海岸開拓の外

洋型」と遊水池的役割をもっていた湖沼の干拓、ショートカットによる旧河道の干拓と細区分を行なっている。谷岡論文は全国的なスケールでの類型化を目的としているので、各タイプの詳細な言及はなされていないが、地理学の側よりの類型化をもとに新田の特色を把握している点が注目される。

上記の谷岡の主張した観点は、福田徹にうけ継がれている。福田はその観点にたち、新田開発の地域差を解明した論文を既にくつか発表している。¹⁰中部地方、伊勢湾北部を対象にした論文ではいづれもまず最初に石高、村数の変遷などを通じて対象地域の全体像を把握し、次に各々の地域毎に自然条件、開発主体、形態、展開など、新田開発のもつ様々な相を明らかにするという手順で叙述が進められている。それは、百花繚乱ともいふべき、様々な視点から行なわれ、かつ地域的にも全国に及ぶ数多くの研究を新田の地域差把握という統一的視点から整理、再構成し、まとめあげたものである。従来の新田研究を集大成し、系統だてる試みとして大きな意義をもつものと思われる。なお、福田はこの研究に先立ち、すでに新田開発に関する個別研究を行なっている。それらは、富士山麓南西、岩木山麓をフィールドに選び、その周辺の沖積平野との関連で開発を捉えようと意図したものである。¹¹前者では、富士山麓南西の新田集落の分布から四つに地域区分し、各々の性格を明らかにし、後者では、岩木山麓が津軽平野の開発の展開過程の中でどのような立場にあったのかを解明している。火山山麓の新田の単なる個別研究ではなく、視野を広げて地域的な関連で開発を捉えている点に、福田が現在進めている研究にとっての端緒が認められるように思う。

ところで、三浦鉄郎は、秋田県をフィールドとして新田開発史の研究を進めており、既にいくつかの論文を発表している。¹²これらが集大成されれば、対象とする地域が狭いだけにより詳しい新田開発史が編まれることになるで

あろう。

一方、小地域社会を対象地域として新田開発とその後の展開をミクロに追究した書も公刊されている。松原義継の『本阿弥輪中』¹³がそれである。松原は、輪中地帯の中央部に位置する本阿弥新田を対象に、そこに伝わる豊富な文書史料をもとに、当該新田の開発、土地利用、農業生産、治水、領主的土地制度、人口などの歴史的展開を多面的に解明している。この書は、当該新田のみをとり上げて論じているのではなく、輪中内の他村あるいは他の輪中と比較しながら把握することに留意している点で、単なるモノグラフ的研究をこえている。輪中地域全体を対象とする総合的研究のある一方で、恵まれた史料を生かして精細な、いわば微細地誌的な研究を行なうことも、地域の具体的な姿が浮び上がるという点で重要なことであろう。ただ、その際に対象となる小地域の位置づけをしっかりとしておくことが必要である。

この節の最後に、喜多村俊夫『新田村落の史的展開と土地問題』¹⁴について触れておこう。この中には、著者の戦後の新田研究が八篇（西日本の六地域）収められている。各篇とも開発の経緯、入植農民の土地所有、地主——小作間の貢租、地代など土地を巡る諸関係、開発後の農業の展開などを綿密に論じ、また、それらは明治以降の変遷にまで及んでいる。正に題名通りの内容である。この書は、喜多村の名著『日本灌漑水利慣行の史的研究』¹⁷の、いわば各論篇に相当するものであるが、フィールドがやや地域的に偏っているのが惜しまれる。

(二) 水利研究

新田が開発されるためには多くの困難が解決されなければならない。その中でもとりわけ重要なのは水の問題で

ある。水利に関する研究の動向は既に橋本征治¹⁸、田林明により簡潔に要領よくまとめられたものがあるので、それに譲るとして、ここでは近世村落研究の課題と関連させて水利研究をとり上げてみたい。

山崎は、前記の展望の中で近世村落研究には空間的観点¹⁹が欠如しがちであることを既往の研究の反省点としてあげている。²⁰ 水利研究では近年、前出の橋本、田林により空間構造に着目した研究がなされている。橋本は、近世の村落構造を説明する研究の一端として村落地域を水利面から考察している。²¹ この中では、自然的条件、開拓、水利開発の過程を指標に水利地域区分を行ない、次に水利組織に関連する諸要素（水利行政、水の充足度、水利組織の規模・運営機構、水利権の在り方など）を分析し、それらは顕著な地域性を示すことを指摘し、さらに水利地域区分との高い相関があることを明らかにした。そして用水の最も基本的な構成単位としての村が用水幹線からのように水を得ているかということ²²で水利組織の空間構造に関して四類型（亜類型をも含めれば六類型）を設定し、八つの水利地域区分との関連を追究し、小規模用水地域では小用水型が、灌漑域の広い地域には大用水型、合口用水型が卓越していることを明らかにした。このような試みを他の地域にも適用し、事例研究を積み重ねれば、水利からみた村落地域構造の地域性の解明に大きな成果を付け加えることになるであろう。

また、田林は明治以降を中心とした農業水利の空間構造を説明するの²³に意を注いでいる。その一つは黒部川扇状地を対象に大正期以降から現在に至るまでの農業水利の空間構成の変化過程やその要因を検討したものである。即ち、水利空間を水利利用者の相互規制の働く空間（個人的な利害関係）と規定し、支線用水の空間（部落）、末端用水路の空間（受益者グループ）、幹線用水の空間（市町村あるいは水利組合）の各段階の水利空間の組合せ、配列状態の変化を追っているのである。そして、水利空間は幹線用水の水利空間が扇状地上に並列していた状態から、合

口事業の進展で最上位の水利空間に合口用水路が来、土地改良区の積極的な動きの中で次第に幹線用水路、末端用水路の規制力、制約力が弱まって来たことを明らかにした。

さらに田林は²³⁾、この分析手段を發展させて北陸の三平野（高田平野、黒部川扇状地、手取川扇状地）を対象に農業水利の空間構造を検出し、その性格の違いを比較検討した。そして、農業水利の空間構造は農業水利事業の展開（灌漑施設の改善で水利事情がよくなる）につれて、並列的なものから統一的なものへと移行するという發展系列を示した。この論文は前稿とは異なり、「水利施設の機能範囲、水利施設の受益者によって構成される水利組織の支配範囲、水利慣行のおよぶ範囲」を水利空間の設定基準として、基礎的な水利空間からより高次の水利空間までを画定している。基準を明確にすることにより、統一的な把握が可能になり、他の地域と比較検討ができるようになったのである。

水利には様々な側面がある。地理学において水利研究を行なう場合には、水利の個々の要素を総合的に捉え、総体として考察し、空間構造という概念でその地域性を説明していくことが大切であろう。橋本、田林の方法は今後の水利研究に一つの新しい道を拓いたものと思われる。近世では新田開発により従来の水利体系に大きな変化が生じたことがしばしばあった。²⁴⁾新田開発における水利研究では、橋本、田林の観点も加味して行なう必要がある。

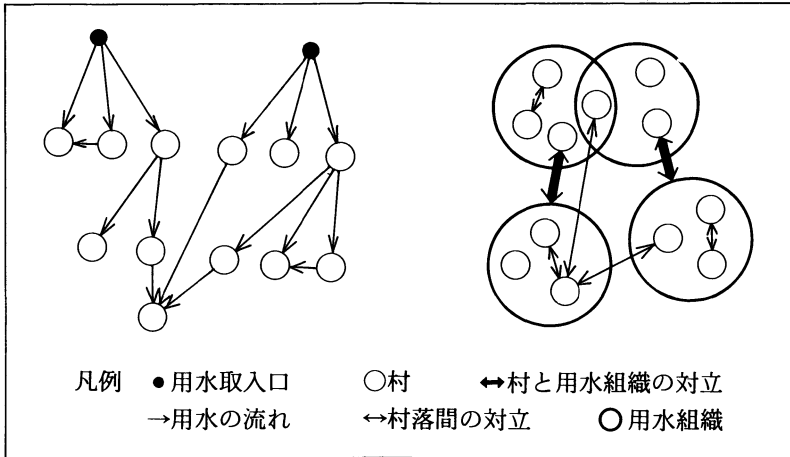
しかし、このような方法がそのまま適用されるのは排水に問題のない地域を対象とした時である。低湿地に事例研究を求めるならば用水のみならず排水にも注目しなければならぬ。低湿地の歴史は水との闘いであったといっても過言ではなく、村落の関心は治水、排水にあり、多大の資本、労力が注がれてきた。特に近世は低湿地に開発の手が加えられた時期に相当する。開発に際し、用水の確保もさることながら、排水をいかに円滑に行なうかが重

要であった。また、開発後も耕地の維持、生産力の安定には排水をうまく進めることが不可欠の条件であった。従って、低湿地において水利空間を考察する場合には、用水に加えて排水も考慮に入れ、さらにそれらの前提ともいふべき治水も含めて解明していくことが必要とならう。

かような例として、近世の越後平野があげられる。周知のように現在でこそ日本を代表する穀倉地帯となつてゐる当該平野は、かつては低湿地が広がつた湛水状態の洪水常襲地帯であつた。明治以降の治水工事、土地改良事業などの結果、現在のよゝな平野になつたのである。

以下、近世の越後平野に即して具体相を簡単に述べておくことにする。この平野は、阿賀野川を境に東西でその自然的特色に大きな違いがある。西側は、全体として傾斜が非常に緩やかで、輪中形態のいわゆる洲島がいくつか発達しており、その内部は低湿状態であつた。一方、東側には、紫雲寺瀧、福島瀧の大きな瀧があり、その周囲に低湿地が広がつていたが、全体としてはやや傾斜は急になつていた。

西側の洲島ではいずれも洲島の中央から下部寄りに遊水池をもち、そこへは悪水が流入しており、遊水池からは一本の排水専用の河川が流出してゐた。遊水池へ流入する河川は用排兼用である。この地域の用水の取水形態には二つある。一つは、周を流れる河川に樋管を設け、一カ村ゝ数カ村が一単位となつて取水するものであり、もう一つは、前述の用排兼用の水路より取水するもので、前者同様その規模は小さい。排水に関しては、各村とも利害が対立している。それは具体的には、水路の堰、水路の両岸の「江丸」とよばれる堤防を巡る問題となつて現われる。特に、洲島から洲端にかけては上手の村は悪水を早く排除することが、下手の村にとっては用水として必要分だけ受け入れ過剰な水は拒否することが、それぞれ自村の死活問題につながつていて、隣接した村々は一村一国の関係²⁶



第1図 洲央付近の用水の流れと水利構造の模式図

にあった。洲島内の用水・排水に関する村々の結びつきの一つに、図で示したものが想起されるのではないか。用水では結びつきながらも排水では緊張をはらんだ対立関係にある。洲島内にはこのような村々の結合がいくつも並列的であったと考えられる。これらの村々が統一的な組織で水利改善事業にとり組むのは明治以降のことになる。²⁷⁾

一方、東側の地域には、加入している村数が多く、灌漑面積の広い用水組織がみられる。例えば、福島潟南の大荒川流域には羽黒堰が設けられ、五十三カ村より堰組が成立していた。²⁸⁾ また岡方組は阿賀野川より取水していたのであるが、前者同様五十三カ村より構成されていた。²⁹⁾ 両組とも取水口から長大な用水路が延びていて、各村へ水が運ばれたのである。しかし、福島潟周辺の低湿地域では、数カ村³⁰⁾ 二十数カ村と組織する村数は少なくなってくる。村数の多少だけで速断するのは無理だが、低湿さが増す程、一つの取水口より取水する村数は減って来ることが予想される。勿論、水利の空間構造に影響を及ぼす因子は多い。それら

を一つ一つ検証した上で、この地域の水利の空間構造の解明をはからなければならない。低湿地の場合をも併せ考
えることにより、水利の空間構造の理解が深まり、水利研究における地域性の解明に一層の寄与をするものと思わ
れる。

おわりに

以上、(一)では新田研究、(二)では水利研究について、それぞれ新しい動向を述べてきた。近世の歴史地理学に関し
ては、事例研究はぼう大な量の蓄積があるのだが、さらにはそれらをふまえて新しい地平を切り拓くような試みが
欲しい。そういう声がかねがね聞くが、ここでとり上げた諸研究はその願いをかなりの程度まで満たしてくれたよ
うに思われる。以下、述べてきたところを要約すると次のようになる。

○ 新田研究においては、地理学の観点に立った類型化がみられ、自然的条件を重視する研究が出てきたこと。
○ 豊富な事例研究を統一的な視点から整理、再構成する試みがみられること。これが全国にわたってなされた
ならば、新田地誌ともいべきものが完成するであろう。

○ 水利研究では、空間構造を解明する研究が進んでいる。水利を全体として捉えることは、とくに地理学の立
場からの研究としては大いに意義があり、また、従来の近世村落研究に欠如しがちだった面を埋めるものともな
う。

○ ④で記した研究を全国各地に広げてゆくことが望まれるが、その際、低湿地では排水・治水も考慮に入れ、
考察すべきように、自然条件の違いにより指標のとり扱い方を変えていかなければならないこと。

なお、新田研究、水利研究に関しては毎年数多くの論文が発表されているが、本稿では冒頭に記したように、新しい動向を探ることに目標をしばった。さらに紙数の制限もあり、多くの研究を割愛せざるを得なかった。詳しくは、「人文地理」各年の学界展望欄を参照されたい。

注

- (1) 山崎謹哉「地理学におけるわが国近世村落の研究——その展望と問題点——」人文地理三一—二 一四二、一四三ページ
- (2) 矢嶋仁吉「武蔵野の集落」古今書院 一九五四年
- (3) 菊地利夫「新田開発」上・下二巻 古今書院 一九五八年。なお、同書の改訂増補版が一九七七年に刊行されている。
- (4) 日下雅義「わが国における湖面干拓の諸類型とその地域的性格」立命館文学一八五、
- (5) 日下雅義「平野の地形環境」古今書院 一九七三年
- (6) 斎藤晃吉「湖沼の干拓」古今書院 一九六九年 二五—二八ページ
- (7) 籠瀬良明「低湿地——その開発と変容」古今書院 一九七二年
- (8) 谷岡武雄「平野の地理」古今書院 一九六三年 二二〇—二二四ページ
- (9) 前掲(3)一三〇、一三一ページ
- (10) 福田徹「中部地方における新田開発の展開」竜谷大論集四一—四
同「伊勢国北部における新田開発の展開」(立命館大学文学部地理学教室・同大学地理学同校友会編『地表空間の組織』古今書院 一九八一年所収)
- (11) 福田徹「富士山麓南西地域における新田集落——特にその分布と開発過程について——」人文地理一五—六
同「岩木山麓の開発に関する歴史地理学的考察——沖積平野の新田開発と関連して——」人文地理一九—一
- (12) 三浦鉄郎「米代川流域の近世期の開発と新田集落」地理学評論三五—七

- 同「雄物川及馬場目川氾濫原の新田開発」地理学評論三七—
 同「八郎瀧東岸平野における開発の歴史地理学的研究」地理学評論四三—
 同「松原義継」本阿弥輪中——藩政時代における輪中農業の成立と変貌——」二宮書店 一九七七年
 (13) 安藤萬壽男編「輪中——その展開と構造——」古今書院 一九七五年
 (14) 尾崎庸四郎「微細地誌——地誌学・社会科教育学の原点——」二宮書店 一九七九年 五—一三ページ
 (15) 喜多村俊夫「新田村落の史的展開と土地問題」岩波書店 一九八一年
 (16) a. 喜多村俊夫「日本灌漑水利慣行の史的研究」總論篇 岩波書店 一九五〇年
 (17) b. 各論篇 同 一九七三年
 (18) 橋本征治「近世の礪波地方における村落間の水利組織について」地理学評論四七—一二
 (19) a. 田林明「黒部川扇状地における農業水利の空間構成」地理学評論四七—二
 (20) b. 同「北陸地方における農業水利の空間構造」地理学評論五四—六
 (21) 前掲(1) 一四八ページ
 (22) 前掲(18)
 (23) 前掲(19) a
 (24) 前掲(19) b
 (25) 前掲(17) a 三八四—四〇〇ページ
 (26) 前掲(17) b 二三五—二四九ページ
 (27) 『越後国西蒲原郡村誌』(「新潟県郷土叢書」所収 一九七六年) 他
 (28) 鳥谷部仁編「亀田郷治水史」亀田郷水害予防組合 一九六六年
 (29) 『白根郷治水史』白根郷普通水利組合 一九四五年) 他
 中村和子「大荒川水系の須走堰」水原郷土史料 4
 『豊栄年表資料7』豊栄市役所 一九七八年

(30) 『豊栄年表資料6』 豊栄市役所 一九七七年
(31) 「一九七六年 学界展望」 人文地理二九―三 五九、六〇ページ